

要旨整理

本文中において見られるさまざまな因果関係における原因・理由の把握・理解を試す設問が理由説明問題である。論理的に文脈を把握する力が必要とされる。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部「……」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① まず傍線部の内容を把握する。指示語が含まれている場合はその指示内容を正しくおさえる。
 - ② 傍線部の前後に「なぜなら」「というのは」といった理由を示す接続語があれば、そこに着眼する。もしこのような理由を示す言葉がなくても、理由となる事柄は傍線部の前後に書かれていることが少なくない。まずは傍線部の前後に手がかりを求め、見つからない場合には段落を越えて該当箇所を探す。理由説明を求める設問では本文中に理由づけがなされていないことはありえない。
 - ③ 文脈をとらえる際には、「……だからになる」という両者の関係を見失わないようにする。選択肢の中には、内容的には正しいが傍線部の理由としては適当でないものが含まれていることが多いので、選択肢が傍線部の理由として適当かどうかを必ず吟味しなければならない。
- 設問箇所以外にも、文章中にはおさえておかななくてはならない因果関係は数多く存在している。因果関係をおさえることは文章読解の基本であることをつねに意識しておかなければならない。

演習問題 A

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

森は、人間の生活、生産の場であると同時に、鳥や動物たちの棲息地でもある。

鳥や動物たちは、自分たちに適した場所を探して森の中に棲む。それが、時に、人間の生活空間あるいは生産の場所と重なりあう場合がある。「こんべえとからす」の話ではないが、鳥や動物たちの行動が、人間の生活と衝突する場合もしばしば生ずるのは事実である。

鳥や動物たちの行動については、まだまだ人間の知らない部分の方が多い。そのために鳥や動物たちの行動の結果に對して「受忍」したり、「歯止め」をかけたりするに当たって、きつちりとした一線を引くことが難しい。そのことが鳥獣害の処理をめぐって、人間社会の中でいろいろなトラブルを起こす因ともなる。

鳥にしても、害虫を食べてくれる場合には人間は歓迎する。樹木に害を与える鱗翅目の昆虫の幼虫(毛虫)を好んで食べるのは、カツコウ、ツツドリ、ホトトギス等のトケン科の鳥であり、卵のうちに食べるのは、カラ類(シジュウカラ、エナガ等)の鳥である。これらの鳥は、樹木を虫害から守ってくれる益鳥であるから、人々はそれらを追い払うことはしない。

ある年の春に山へ行ったら、いつも道路沿いに満開の花をつけているソメイヨシノの花つきが悪い。どうしたのか聞いてみると、ウソという鳥がきて、つぼみのうちにせつせつといばんでしまったとのことであった。ウソのおかげで花見が当て外れになったが、この程度のことなら「ほんとかな？」で、笑って済ませられる。

ところが鳥や動物たちは、人間にとって大切なものの「程度」などは知らない。その典型的な例が、ニホンカモシカによるヒノキ植栽木の「食害」である。

岐阜県では、高価なヒノキの幼木(青森や長野では、スギやカラマツであるのでヒノキほど値段が高くない)を食い荒らすというので、莫大な被害の実態が、林業に携わる人々によつて訴えられている。カモシカによる造林木の「食害」について、どのような仕組みが見られるのかということは、今、専門家が集まって調査・分析を進めている最中である。その結果はともかくとして、事実、ヒノキ幼木の「食害」は相当な規模に達しているのは否定できない。

森に生きる人々が、自分たちの生活のために行つた生産行為の結果が、同じ場所で生活している動物によつて摘み取られてしまう。特に小規模な山主にとっては致命的な被害となる。

もちろん継続的に主軸を摘み取れない限り、幼木は再生力を持っているので、かわりの芽が立ち、上に伸びては行く。しかし林業というのは、ただ木を大きくすればよいわけではなく、できるだけ「良い木」(曲がりがない、筋がない、目あいがいきれい、色つやがよい)というように外形的な質と、材質という内部的な質とが複合してできる)をつくって高い評価で売れるようにもつていくことを目標としている。幼木のときに将来シユカンとなる部分をカモシカによつて摘み取られたヒノキは、たとえ生長しても、伐採して製品化したときに、「良い木」にならないであろうといわれている。

先に述べたような林業の目標が、大きく狂わせられるのである。

森に住み、鳥や動物たちと日常的に接し、同じ場所で生活してきた人々には、本来鳥獣に対する「敵対心」はない。これまで長い間森の中で、人と鳥獣は共存することができたのである。現にカモシカがいても、林業に対する被害を与えていない地域だってある。また多少の被害であれば、それが「林業の宿命」であると「受忍」することだってできる。森に住む人々は、これまでそのようにしてきた。林業は、自然災害や火災、虫害等によつて、常に「危険」にさらされていることぐらいは、森に住む人々は百も承知である。

それでもカモシカによる「食害」は「受忍限界」を超え、森に生きる人々の訴えは強い。この問題をめぐって、「自然保護」と「林業」が、相対立しているような局面を、私たちはしばしば経験する。

森に住み、林業に携わる人々が、今、カモシカをめぐる問題について訴えようとしていることは何であろうか。私がこれまで聞いてきたことをまとめれば、それは、次のようだ。

「これまで国は、森林、林業に対して、一体何をしてきてくれたか。特に山に住み、森の環境をつくり、守り続けてき

解説のポイント

読解のポイント

- (1) 傍線部の前後などを手がかりに、まず自分で理由づけしてみるとよい。特に、その要点となる語句を見つけておくと、選択肢の吟味がしやすくなる。ただし、解答は筆者の意見に従うこと。必ず最終的には本文に添った理由づけにすること。
- (2) 理由づけをしている箇所を他段落に求める場合は、傍線部と同一内容の表現箇所を探し、その前後に手がかりを求めるようにするとよい。
- (3) 一つまたは複数の段落全体が理由となっている場合も考えられる。段落間の関係にも注意を払うこと。

重要語句

◇受忍＝耐え忍んでがまんすること。

◇ホトトギス＝カツコウ目カツコウ科の渡り鳥。初夏のころに渡来する夏鳥。「時鳥」「杜鵑」「不如帰」「子規」などと書く。

◇益鳥＝人間の生活に直接的・間接的に役立つ鳥。対義語は「害鳥」。

◇ソメイヨシノ＝サクラの一種。各地で最も普及しているサクラの代表種。

◇典型的＝ある種類のものの特徴や性格などをよく表しているさま。

◇食害＝昆虫・鳥類・動物などにより農林産物などが食い荒らされること。

◇カラマツ＝マツ科の落葉高木。材木としては、樹脂が豊富で、耐久性、耐湿性が高く、建材としての使用価値は高い。

◇致命的＝取り返しのつかないさま。

◇百も承知＝十分わかっていること。

◇局面＝物事のなりゆきや情勢。

自分たちに対して、何をしてくれただか。それでも自分たちは、エイエイとして森をつくってきた。厳しい自然環境、過酷な労働条件にも耐えて、社会の需めるものを提供しようとしてきた。それは、耐えることの連続であった。それなのにこの国の経済発展の恩恵を受けること少なく、そればかりか林業をやっていくことさえ困難な状況に追い込まれてきたではないか。今またカモシカにさえ、一方的に耐えよというのか。自分たちの生活の見通しすらたてられない状態で、カモシカ生存の保証を自分たちだけに一方的に押しつけるのか。何故自分たちだけがいつも耐えなければならぬのか。

森に住む人々は、鳥もいれば動物もいる中で生活していきたいのである。しかし、生活への不安は、できるだけ取り除かねばならない。動物のために生活を放棄することを、誰も認めてはくれない。

犬嫌いの人はいても、犬を憎悪する人はいまい。しかし、犬が「お犬様」になったとき、人々は、犬を憎悪した。それは、犬に向けられたものではあっても、犬自体に向けられたものではなく、犬を「お犬様」にしたリフジンへの憎悪であった。

今、カモシカを「お犬様」になぞらえる森に住む人々の言葉に、私は抑圧され続けてきた人々の「嘆き」を聞く思いがする。

カモシカによる「食害」を林業を行う上で「避け難い」災害として認めつつも、なおかつできる限り被害を軽くする方策を社会全体としてつくり上げることが要求する、森に住む人々の「正しい」意見を、「お犬様」に向ける憎悪に変質させないために、私たちは考え、行動しなければならぬと思う。

「森の外」に住む人々は、これまでの森の産物——とりわけ自然的環境とか、風景とか、水とかの「公共財」で、直接貨幣価値で評価されていないもの——をどのような形で享受してきたであろうか。人々は森に接し、利用するに当たって、「森は無料」と思っていたのではなかったか。森に源を発する水についてもまた、同様ではなかったか。自然に恵まれたこの国の人々にとって、自然は何の苦もなく得られたものであったのであろう。自然をつくり、育て、維持している人々の存在を、一体どれだけの人が理解していたのであろうか。

都市で便利な生活を楽しみながら、山村に対しては、都市にもないものを求めようとする。それが、山村の「自主性」を尊重した上でなされるなら、とりたてて問題とはならない。しかしそのことを「社会的要請」という一種のポウリョクによって山村に押しつけるなら、たとえ「山村への理解」という装いをとっていても、それは、都市の山村に対する優越という「信条体系」——種の社会的な信仰ともいえる観念——を支える以外の意味は持ち得ない。

森に住む人々に、「森の外」の思考を強制してはならない。「森の外」からできることは、森に住む人々のつくったものに対する「正当な」評価である。それは、森の内と外との間に、対等の関係が成り立っていることを基盤にして、はじめて可能である。

ニホンカモシカの保存、森の環境の保全、水の確保といったことが、私たちの社会を成り立たせていく上で不可欠の「財物」であると考えらるなら、私たちの社会は、それらを持続して生産（保全）する主体、すなわち森に生きる人々の生活・生産の仕組みそのものをこそ、保ち続けなければならないのである。

(注) ごんべえとからす：「権兵衛が種時きや鳥がほじくる。三度に一度は追わずばなるまい」という俗謡からきた言葉。

鱗翅目：節足動物門昆虫類の目の一つ。チョウやガの仲間。

ニホンカモシカ：ウシ科の哺乳類。日本の特産種で、本州以南の高山帯に棲む。国の特別天然記念物。

「お犬様」：將軍徳川綱吉の時代に発せられた、いわゆる「生類憐れみの令」を念頭に置いた言い方。

(林進「森の心 森の智慧」による)

問一 線a～dの漢字と同じ漢字を含むものを次の各群のA～オから一つずつ選び、記号で答えよ。

a シュカン		b エイエイ	
ア	クダを通す。	ア	河原でやエイをする。
イ	初志をツラヌク。	イ	エイリな頭腦の持ち主。
ウ	キモがすわっている。	ウ	エイダンをくだす。
エ	シャツがカワク。	エ	勝利のエイカンを得る。
オ	ミキが太い。	オ	エイセイ的な調理場。

(オ)

c リフジン		d ポウリョク	
ア	道をタズねる。	ア	獨創性にトボしい。
イ	ハナハだしい誤解をする。	イ	秘密をアバク。
ウ	苦しいときのカミ頼み。	ウ	進行をサマタげる。
エ	多くのヒトに会う。	エ	今日はインガしい。
オ	話の種がツきる。	オ	危険をオカす。

(オ)

問二 線①「きっちりとした一線を引くことが難しい」とあるが、「難しい」のはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次のA～オから一つ選び、記号で答えよ。

- A 森は人間の生活や生産活動の場であると同時に鳥獣の棲息地でもあるので、人間と鳥獣とが共存する場所と、鳥獣を排除して人間だけが住む場所とを分けることができないから。
- イ 鳥獣の生態にはまだ不明な部分が多いので、人間が森で生活や生産活動をするに際して、鳥獣の行動の何を害とみなし、何を益とみなすかは、簡単に決められないから。
- ウ 鳥獣の行動が、森における人間の生活や生産活動に及ぼす影響に対して、それを害とみなす「歯止め」派と、自然保護の立場に立つ「受忍」派との対立はなくならないから。
- エ 人間が鳥獣の棲息地を侵している問題と、鳥獣の行動が人間の生活に影響を及ぼす問題とは、もともと土俵の違う問題なので、どちらを優先して考慮すべきかを決められないから。

◇恩恵Ⅱなさけ。めぐみ。

◇保証Ⅱ（人物やものごとについて）確かであるとうけあうこと。

【参考】補償Ⅱ損害、出費などをおぎないつぐなうこと。（→問三）

【参考】保障Ⅱ危険などの障害がないように保つこと。

◇リフジンⅡ理屈に合わないこと。

◇方策Ⅱ手段。対策。

◇公共財Ⅱ公共機関などによって提供され、誰もが共同で享受でき、個人では独占できない財・サービス。

◇享受Ⅱ①受け入れて自分のものにする。②精神的にすぐれたものを味わい楽しむこと。

◇保全Ⅱ維持管理して望ましい状態にしておくこと。

POINT

◇エイダンⅡ①思い切りよく決断を下すこと。②すぐれた決断。

△傍線部の理由説明を求める設問。傍線部に対して、どこにその直接の理由を説明した部分があるのかを探す。文と文をつなぐ冒頭の表現に着目する。

○オ 人間は鳥獣の生態について知っていることが少ないので、森における人間の生活や生産活動にとって有害とわかっていても、鳥獣の行動をどう制限してよいのか判断できないから。

「オ」

問三 — 線②「森に生きる人々の訴えは強い」とあるが、「森に生きる人々」が訴えているのはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 同じ森を生活圏とするカモシカによる造林木への被害によって、自分たちの生活や生産行為が脅かされるようになった。さらにこの国の経済発展が林業を無視して推し進められた結果、林業それ自体が困難な状況になったので、今後は社会による経済的な補償が、当然なされるべきである。

○イ カモシカを保護することが、森に住む自分たちの生活を脅かすものであってはならない。社会の需める「良い木」を生産し、提供し続けるためには、社会全体が林業の現実に注目し、カモシカによる造林木への被害や自然災害などに関しても、さまざまな対策を講じるべきである。

ウ 森の中で自分たちは多くのことに耐えて鳥獣たちと共生してきた。しかし、「受忍限界」を超えたカモシカによる被害はもはや耐えられないものになっている。カモシカの造林木への被害対策は、社会の要請に従うのではなく、あくまで自分たちの生活や、林業を守るために行われなければならない。

エ 森の環境をつくり、守り続けてきた自分たちの生活が、今カモシカによる造林木への被害により脅かされている。そればかりか、社会は被害への対策を自分たちだけに押しつけている。しかし、自分たちだけで問題を解決するのは限界にきているので、むしろ森の外の社会が問題解決の責任を担うべきである。

オ 森における自分たちの生活や生産活動が被害の鳥獣の害への対策は、これまで自分たちが実行してきた。しかし、カモシカによる造林木への被害は、自然保護の域を超えているので、これからは、林業を存続させていくために、社会による調査と判断がなされる必要がある。

「イ」

問四 — 線③「カモシカを『お犬様』になぞらえる」とあるが、森に住む人々にはなぜ「カモシカ」を「お犬様」にたとえるのか。その理由の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 森を破壊するカモシカは、森に住む人々の生産行為や生活にとって有害で、人々の憎悪の対象となっているから。

イ カモシカによる造林木への被害対策が、社会全体で講じられず、森に住む人々の負担となっているから。

ウ 種の保全という観点から、カモシカは貴重な種であり、何よりもその保護が緊急の課題となっているから。

○エ 森に住む自分たちの生活よりも、カモシカの生存を優先させて、それを強制する社会に憤りを感じているから。オ カモシカは森の住人として、歴史的に人々と共存してきたので、身近な自然として親愛感を持っているから。

「エ」

問五 — 線④「『森の外』の思考を強制してはならない」とあるが、具体的にはどのような思考を強制しているというのか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

○ア 人間が鳥や動物たちと接したり共存したりすることは、自然の少ない都会ではできないので、恵まれた自然の中で生活している森の人々が、森に棲む鳥や動物たちを保護するのは当然のことである。

イ この国の恵まれた自然や森は、実は人間が作り守ってきたものである。森や自然を豊かなままに維持していくために、森に住む人々は、鳥や獣たちを有益なものとして有害なものに分けて接しなければならない。

ウ 自然的環境や風景といった森の産物は、これまで無料であった。しかし、森に住む人々は、それらをあらためて貨幣価値で評価することによって、森が生み出す豊かさを利用するべきなのである。

エ 都会では失われてしまった豊かな自然を、森の中に求めるのは当然である。森に住む人々は、自然保護に必要な経費や労働の一部を都会の人々にも負担させて、自分たちの生活を守るべきである。

オ 森は自然の豊かさを、林業は森の産物を、それぞれ都会に提供するものであるから、森に住む人々は自分たちの生活を森の外との関係で考えるべきであり、その独自性をことさらに主張してはならない。

「ア」

問六 本文で述べられている筆者の主張に合致する考えを次のア～ウから二つ選び、記号で答えよ。

ア 経済発展の論理を森のなかに導入することで森に住む人々の生活を守り、なおかつ今後の林業を自然保護の観点から再編していかなければならない。

イ 都市と山村とは利害を共有したり、対立したりすることがあるが、それぞれがそれぞれの特殊性を解消することによって調和的な社会を築いていくべきである。

○ウ 森林を現在ある状態のまま維持することを森に住む人々に一方的に求めるのではなく、森林の環境を保全する仕組みを社会全体で考えなければならない。

○エ 自然保護と林業とはしばしば対立するが、それを森の内と外との対立として見るのではなく、人間と自然とのかわり方の問題として解決を図るべきである。

オ 山村の生活や生産の仕組みと都市のそれとを再考することで、都市に対する山村の伝統的な優位性を回復していくことが自然保護の基本的な出発点である。

カ 自然環境の保護は、現代における最も緊急の課題であり、とりわけ数の少なくなった生物種の保護は地球的規模で展開されなければならない。

「ウ」「エ」

△傍線部の内容説明を求める設問。「森に生きる人々の訴え」が述べられている段落を探し、それに続く筆者の説明をふまえて、その「訴え」を把握する。

△傍線部の理由説明を求める設問。カモシカと犬の類似点を、前後の段落に求め、犬が「お犬様」となった状況と、現在森に住む人々が置かれている状況の類似点を把握する。

△傍線部の内容説明を求める設問。「森の外」とは、第十八段落冒頭に「『森の外』に住む人々」とあるように、「森に住む人々」に対比される表現。その段落以降の内容から「森の外」の「思考」を読み取る。

③「森の外」に住む人々
→ 森は無料、社会的要請、信条体系
→ 筆者は否定する
④ 筆者の主張
→ 森と人々の関係
△筆者の主張に合致するものを選択させる設問。筆者の主張は主として第十七段落以下（「カモシカによる『被害』を……」）で述べられている。特に「……しなければならない」といった表現に着目する。

テーマ: 「森」との関係
→ 森と人々の生活
内容: ① 人と生物の共生
→ 衝突、受忍、② 敵対心
→ 線と引くこと、森は
② 自然保護と林業の対立
→ 林業に携わる人々の生活への不安と社会への責任